

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

**Implicit Relational Assessment Procedure (IRAP)
による変容のアジェンダの測定方法の確立**

Establishing a method for measuring a change agenda based
on the Implicit Relational Assessment Procedure (IRAP)

2021年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

井上 和哉

INOUE, Kazuya

研究指導担当教員： 熊野 宏昭 教授

体験の回避とは、不快な私的出来事（例：身体感覚、情動、思考、記憶）との接触を避け、私的出来事の形態、頻度、状況を変容しようとすることである（Hayes, Strosahl, & Wilson, 1999）。体験の回避はルール支配行動としての側面を持ち（Masuda・武藤, 2011）、様々な精神疾患の中核要因であるとされる（Fledderus, Bohlmeijer, & Pieterse, 2010）。Acceptance and Commitment Therapy（以下、ACTとする）では、体験の回避の代替行動としてアクセプタンス方略を提案しており、その有効性が多くの研究によって実証的に支持されている（e.g., Hayes et al., 1999）。アクセプタンス介入の阻害要因としては、変容のアジェンダの存在が指摘されている（Bach & Moran, 2008 武藤・吉岡・石川・熊野訳 2009）。変容のアジェンダとは、「不快な思考や感情がなくなれば、問題は解決し、より良い人生が送れる」といった考え（ルール）である（Flaxman, Blackledge, & Bond, 2011）。クライアントの変容のアジェンダへの確信度が高い場合、アクセプタンスを体験の回避の方略として用いてしまうという問題がある。これまで、変容のアジェンダの測定は、質問紙や Visual Analogue Scale といった顕在指標による方法が用いられており、変容のアジェンダを弱めておくことでアクセプタンス介入が奏功しやすくなるなど、様々な知見が蓄積されてきた（酒井ら, 2014）。しかしながら、顕在指標による測定は社会的望ましさ（Arnold & Feldman, 1981）や要求特性（Orne, 1962）の影響を受けることが想定され、対象者の評定が歪む可能性が存在する。本学位論文では、潜在的な認知を測定する PC 課題の Implicit Relational Assessment Procedure（以下、IRAPとする）を用いて、変容のアジェンダの測定を試みた。本学位論文の目的は、短時間の即時的な関係反応の次元における変容のアジェンダ指標の開発と、当該指標が行動指標の変化までも予測が可能であるか検討することである。本学位論文は全6章から構成されている。

第1章では、変容のアジェンダに関する研究の整理を行った。具体的には、変容のアジェンダの定義や、変容のアジェンダがアクセプタンス介入の阻害要因として挙げられること、従来の変容のアジェンダの測定方法は顕在指標に限られていることについて述べた。また、関係フレーム理論から潜在的な認知の知見についてレビューし、IRAPによって変容のアジェンダを測定することの意義について言及した。本研究では、アクセプタンスと変容のアジェンダは直接的な関係ではないが、アクセプタンス介入によるアクセプタンス行動の変化に対して間接的に影響を与える変数として変容のアジェンダを位置づけた。

第2章では、変容のアジェンダに関する研究の課題について整理した。具体的には、(a) 顕在指標による変容のアジェンダの測定方法に限界があること、(b) 行動指標の予測も可能な変容のアジェンダの指標が存在しないという2点を当該研究領域の課題として指摘した。具体的な目的としては、第3章において、変容のアジェンダ IRAP を作成し、その妥当性と再検査信頼性を詳細に検討すること、第4、5章において、変容のアジェンダ IRAP がアクセプタンス介入によるアクセプタンス行動の変化を予測することができるかについて検討することであった。当該指標が作成される臨床的な意義として、今後、当該指標を基準に、より効果的に変容のアジェンダを弱める介入技法を実験室等で検討することができる可能性が挙げられた。また、本研究によって得られる知見は ACT に関する基礎研究を発展させ、治療効果の増大に大きく寄与することにつながる。

第3章では、研究1として、IRAPを用いた変容のアジェンダの指標作成を行った（以下、変容のアジェンダ IRAP とする）。そして、変容のアジェンダ IRAP の信頼性と妥当性の検討を行った。変容のアジェンダ IRAP の作成には ACT の専門家6名によって行い、内容的妥当性を高めた。実験参加者は131名の大学生、大学院生であった。まず、変容のアジェンダ IRAP を達成できた83名のサンプルを用いて、顕在指標との弁別的妥当性が示された。顕在指標として用いた尺度は、変容のアジェンダの質問紙尺度である Change Agenda Questionnaire-b（鳴ら, 2018）、体験の回避の質問紙尺度である Acceptance and Action Questionnaire-II（鳴ら, 2013）、特性不安の質問紙尺度である State-Trait Anxiety Inventory-Trait（清水・今栄, 1981）であった。また、ACT 学習者19名（ACT の専門家や ACT セラピスト）と ACT 非学習者34名のサンプルを用いて、変容のアジェンダ IRAP の得点に差が見られるか検討したところ、両群に得点差が見られ、変容のアジェンダ IRAP の予測的妥当性が示された。そして、1週間後に2度目の変容のアジェンダ IRAP に回答した45名のサンプルを用いて、変容のアジェンダ IRAP の再検査信頼性が検討された。本研究では、一部の項目において再検査信頼性の課題が挙げられたが、変容のアジェンダ IRAP の妥当性がおおむね示された。また、妥当性や再

検査信頼性の結果について、Differential arbitrarily applicable relational model (Finn, Barnes-Holmes, & McEnteggart, 2018) の観点からの考察もおこなった。

第4章では、変容のアジェンダ IRAP がアクセプタンス介入によるアクセプタンス行動の変化を予測できるかについて検討を行った。また、その予測力について顕在指標である CAQ-b との比較も行った。本研究では、アクセプタンスの行動指標として、コールドプレッシャー課題を用いた。そして、アクセプタンス介入を行い、Pre の変容のアジェンダ IRAP の得点と Pre から Post にかけての冷水耐久時間の変化の関連を検討した。本研究では、アクセプタンス群と統制群の2群を設定し、アクセプタンス群には、白くま抑制実験や、形にするエクササイズといったアクセプタンスを増加させる介入を行った。統制群には10分間、地球温暖化に関する本を読むというアクセプタンスを促進させない介入を行った。介入の前後では、主に変容のアジェンダ IRAP、CAQ-b、冷水耐久時間の測定が行われた。解析の結果、アクセプタンス介入の操作チェックが認められた。そして、アクセプタンス群21名のサンプルを用いて、Pre から Post の冷水耐久時間の変化率(Post/Pre) と Pre の変容のアジェンダ IRAP 得点との関連を検討したところ、変容のアジェンダ IRAP のアクセプタンスーネガティブ試行との間に有意傾向で負の相関関係が示された。これらのことから、事前に変容のアジェンダ IRAP のアクセプタンスーネガティブ試行の得点が低い者(アクセプタンスのルールが強い者)ほど、アクセプタンス介入によって冷水の耐久時間が増加しやすいことが考えられた。一方で、顕在指標の CAQ-b は、冷水耐久時間の変化率と有意な相関関係は示されなかった。

第5章では、コールドプレッシャー課題以外のアクセプタンスの行動指標においても、変容のアジェンダ IRAP がアクセプタンス介入によるアクセプタンス行動の変化を予測できるかについて検討を行った。特に変容のアジェンダ IRAP の応用可能性を検討するため、大学生においてよく見られる回避行動のひとつとして、スピーチ場面中の回避行動に焦点を当てた。具体的には、視線追尾装置を用いて、実験参加者がスピーチ中に聴衆者の目の付近を注視できた時間(アイコンタクト)をアクセプタンスの行動指標とした。本研究においても、アクセプタンス群と統制群の2群を設定し、アクセプタンス群には、白くま抑制実験や、形にするエクササイズのほかに、体験の回避の不機能性を検討するホームワークを実施させ、アクセプタンスを増加させる介入を行った。統制群には、アクセプタンスを促進させるエクササイズは実施しなかった。介入の前後では、主に変容のアジェンダ IRAP、CAQ-b、アイコンタクトの時間、スピーチ中の不安、スピーチ後の反芻について測定が行われた。解析の結果、アクセプタンス介入の操作チェックが認められた。しかしながら、アクセプタンス群22名のサンプルを用いて、Pre から Post のアイコンタクト時間の変化率(Post/Pre) と Pre の変容のアジェンダ IRAP 得点との関連を検討したところ、仮説に反して、有意な相関関係は認められなかった。事後的な解析の結果、Pre の変容のアジェンダ IRAP のアクセプタンスーポジティブ試行とスピーチ後の反芻の変化量(Pre から Post) に有意な中程度の正の相関が示された。これらのことから、事前に変容のアジェンダ IRAP のアクセプタンスーポジティブ試行の得点が高い者(アクセプタンスのルールが弱い者)ほど、スピーチ中にアクセプタンスを実践しようとする、かえってスピーチ後の反芻の程度を高めることが考えられた。一方で、CAQ-b はアイコンタクト時間や反芻と関連を示さなかった。

第6章では、本研究で得られた知見に基づき、総合考察を行った。第1節において、本研究結果の整理を行った。第2節では、変容のアジェンダ IRAP の有用性について言及した。第3節では、本研究の限界と今後の課題について述べた。具体的な課題点としては、変容のアジェンダ IRAP の再検査信頼性の低さや離脱率の高さであり、それらの克服のために、変容のアジェンダ IRAP の練習試行の正答率の基準を下げるなどが実験結果から考察された。第4節では、変容のアジェンダ IRAP の臨床応用の展望について述べた。第5節では、本研究知見の人間科学に対する貢献を述べた。これまで変容のアジェンダの測定は顕在指標による測定方法しか存在しなかった中で、本研究では潜在レベルの認知(関係反応)を測定する IRAP によって、変容のアジェンダの測定が可能であることを明らかにし、変容のアジェンダの測定方法を拡充させた。また、アクセプタンス行動が生起するために必要な関係反応を明らかにしたことは、複眼的な人間理解に基づくアプローチが重要であることを示す好例であり、人間科学の発展に寄与するものである。